



ほんの少しだけ、眠っていたのかもしれない。目を開けると、小さな講義室に置かれた長机に私は突っ伏していた。頭がぼんやりする。腕をだらりと下に降ろし、片耳を机にぴったりくっつけてみる。小奇麗にまとまった部屋に響く無機質な空調の音が、机をつたって鼓膜を揺らす。そのまま窓の外へと意識を向ければ、蟬の声がかすかに聞こえる。かき消されてしまった夏の空気が心を覆う。眠りから醒めきっていない身体を起こし、室内の時計を見やる。もう十七時になるのか。

「お疲れみたいです、まりる先生」

背後からの呼びかけに驚いて振り向くと、いたずらっぽく微笑む女がそこにいた。宮田優子、この大学に通う二年生だ。

「びっくりした…いたなら起こしてくれればええのに」

「いや、こっちだってびっくりしましたよ。セミナー終わって、忘れ物取りに来たら先生寝てるんだもん。これはまたとないチャンスだと思ひましてね。私の愛する…いや、尊敬する、原田まりる女史の寝顔をじっくり堪能させていただきましたよ」

口元から八重歯を覗かせながら、彼女ははしゃいだ。

「まー大変なこと言うて」

私がW大学に臨時講師として採用されてから、三か月が経とうとしていた。以前の職場を退職した私は、「哲学カフェ」と題したセミナーを社会人向けに開催していた。そこに大学の関係者が参加しており、声がかかったのである。学内で不定期に開催したセミナーの評判が良かったこともあり、四月の年度初めから、有志の学生を集めたゼミナールを開講することになったのだ。私をからかった彼女も、その有志のうちの一人だ。

「これ、昨日のですよね。すぐその駅前広場でトラックが事故ったやつ」

講義室で帰り支度を終えた頃、今度は右横から声が飛んできた。見ると、机上にぼつんと残された私のスマートフォンを覗き込んでいる宮田さんがいた。うたた寝する前に見ていたニュースサイトが表示されていたのだろう。液晶画面には、傾いた街路樹の前で横倒しになった軽トラックが、でかかかと映り込んでいる。運転席の部分は、木の幹に沿うようにして折れ曲がり、ほとんど原形を留めていない。

「ああ、確か猛スピードでロータリーに入ってきて、そのど真ん中にある街路樹に激突、とかいう話やったかな」

事故が起きたのは昨日の昼過ぎ。雨が降り出す少し前だった。場所は、W大学の最寄駅でもあるT駅。突然、軽トラックが百キロ近い速度でロータリーに侵入し、カーブを曲がりきれずに街路樹に激突。運転手はもちろん即死したが、身元は分かっていない。翌日に迫る議員選挙に向け、駅には地方の有力議員なども集まっていたが、運転手以外の死者は出なかった。

「そういえば私、まりる先生にそっくりな人をT駅で見たんですよ、昨日」

思い出したように彼女が呟いた。

「え、昨日って事故のあった日？」

「そうそう！事故の後、たまたま駅の近くを歩いてたら、先生みたいな男の人が駅前にいたんですよ。フラフラしてたんで声かけようとしたら、野次馬に阻まれて見失っちゃいましたけど。なんというか、似てたと思います。たぶん。雰囲気とか」

「いや、なに自信なくしとんねん。しかも私男ちゃうし…でももしかしたらドッペルゲンガーに会ったのかもしれへんね」

大学を出て、二人で駅へ向かう。冷房の効いた施設から一步外に踏み出すと、まるで夏を刻み付けるかのように、西日が肌を差してくる。生ぬるい熱と湿気に包まれ、額にはすぐさまじっとりとした汗がにじんだ。暑いね、と顔を見合わせた後は、二人ともしばらく無言にならざるを得なかった。百メートルほど歩いたところで、宮田さんが隣を歩く私に話しかけた。

「ねえまりる先生」

「ん？」

「先生は、運命って信じます？」

「どうしたん、急に」

「運命じゃなくてもいいや。縁とか、そういうのでも」

不意の質問の意図が酌めなかった。この子は答えを求めているのか、それとも私を試しているのか。落胆させないよう、言葉を選びながら、丁寧に答えを出してみる。

「分からんなあ。論じられない、と言った方が正しいかもしれへんけど、『起きたことに対して、どう考えて、どう生きるべきか』が哲学の基本やからね。運命とか縁とか、そういう曖昧なものに意味づけを与えるのも自分自身やし」

ふーん、とスマホを見ながらの気の抜けた返事で一蹴される。どちらでもなかったのか。一瞬葛藤してしまった自分を恥じていたが、思ってもみなかった言葉が返ってきた。

「七年前に約束したんです。兄弟同然に育った幼なじみと、『私の二十歳の誕生日になったら、またここで会おう』って。それが、今日なんです。」

彼女の視線は相変わらず画面を見つめていたが、さっきまではなかった確かな熱が、その声にはこもっていた。

「私はあの後すぐ。家庭の事情で地元から東京に引っ越してしまったし、向こうもその約束を覚えてるかは分からない。正直、期待なんかしてないつもりだったけど、ちょっと怖いんです。会えなかったら、七年間信じてた自分が馬鹿みたいじゃないですか」

宮田さんはそう吐き捨てるように言った後、にっこり笑って私の方を見た。

「でも、まりる先生のさっきの言葉で気づきました。自分の思い通りにならなかったからって、拗ねちゃいけないですよ。起きることに意味があると思って、前向きに生きなきゃいけないって、そう思いました」

あらかじめ約束していたらそれは運命ではないのでは、とツツコミを入れなくなったが、我慢した。彼女が彼女なりの答えを得られたなら、それでいい、ということにしておく。

「今から間に合うん？宮田さんの地元、名古屋やる？」

「だから、今から向かうんです。先生、ありがとう。会ったらすぐ帰ってくるんで、報告楽しみにしといてくださいね」

そういうと彼女は駅へと吸い込まれて行った。

行きつけのカフェでセミナーの資料をまとめ、自宅に戻るときには深夜になっていた。明日は久々に企業相手の講習だ。鍵を開けて部屋に入り、ゆっくりと衣服を着替えると、ソファーに腰かけて小さく息を吐いた。

運命、か。疲れた頭で考えてみる。さっき私が答えたように、そういうものはあるのではなく、「偶然の出来事や出会

いをどうにか解釈したくて、運命とか縁とかいう聞こえのいい言葉をあてがった結果」なのだと思う。でも突き詰めていけば、結局はそれすらも主観なのだ。もしかすると、かつてヴィトゲンシュタインが言った、「世界があること」の不思議をいとも簡単に証明してくれる存在がどこかにいるのかもしれない。私たち全員、神様かなにかが作ったボードゲームの中に登場する、七十億個の駒のひとつなのかもしれない。だから世界は上手いことつながっているのかもしれない。なんて。ファンタジーも過ぎるな。

帰りがけに買ったブラックコーヒーに口を付ける。メールチェックを済ませたら寝なければ。パソコンのスイッチを入れようとしたところで、バッグの中のスマートフォンが震えた。

「先生、またブラックコーヒー飲んでましたね」

電話の向こうから聞き慣れた声が出た。宮田さんだ。一応否定したが、たぶん、見透かされている。

「そないなことはどうでもええやろ。で、どうやったん。その運命の相手とか言うの」
で、のあたりで涙をすする音が聞こえた後、スピーカーから耳をつんざくほどの怒鳴り声が響いた。
「もうサイアクでしたよ、サイアク！目の前に態度もガラも悪くてくら一い感じのマスク男が現れて、何を言うかと思ったら『ゴメン、俺今好きな人いるんだ。ここでお前と会ってるのバレたらマズイんだよね。悪いけど、お前は今の生活を大事に生きてくれ。俺もこっちで頑張るから』って！五秒！！それだけ！！本当に見損なっただし、そもそも会わなきゃ良かったし…もう、私の十年間のときめきを返してほしいですよ〜！」

うわああああ、と子供のように泣きじゃくる声がある。気の毒な話だ。けれど、彼女の話しぶりのせいか、どこことなくシュールなエピソードにしか聞こえない。しかも、さっき聞いた時よりときめきが三年ぐらい伸びてないか？

やれやれ。私は小さく咳払いをしてから、諭すように言った。

「分かった。今度は宮田さんのための特別セミナーを企画したるわ。なるべく早く。だから元気出し、そこでまた、話聞いたるわ」

ロータリーに架かる歩道橋の上で、男は額に滴る汗を拭いた。それなりに夜は更けたとはいえ、湿気とアスファルトの放熱で、心地よさは微塵も感じない。

ギターを携えたその男の周りには、どこからか人が現れて立ち止まったかと思えば、時折ばらばらと拍手が起き、気が付くとまたどこかに消えて行く現象が繰り返され、常に五、六人が集まっていた。柄の悪い酔っ払いに絡まれないだけ今日はマシだ。心の中で自嘲のように呟くと、男はマイクを握り直し、前を見据えた。

「お集まりいただいたみなさん、ありがとうございました。次が今日最後の曲です。良かったら聴いてください。流原蓮次で『ヘルプ・ミー・ヴィーナス』」

開け放しておいたギターケースの中の小銭を数え、手帳に書き込む。ほんの数分前まで、やれ孤独だ反抗だと歌っていた人間が、せつせと小金をかき集めている姿はどこか滑稽である。帰り支度を済ませようと機材に手をかけていると、どこからか声をかけられた。

「すみません、あなたのCD、一枚買いたいです」

顔を上げると、一人の男がそこにいた。身長は自分とほぼ同じ、一七〇センチくらいだろうか。黒々とした髪色は、襟足を覆い尽くすほどに伸びていた。骨っぽい体つきに、くたびれたTシャツとジーンズという出で立ちは、なんだか生地が身体に張り付いているみたいで、どこか頼りなくも見える。

「ああ、ええよ。一枚千円な」

そう言う、男はジーンズのポケットから出した千円札を出した。四つ折りになったそれを受け取り、CDを手渡す。ありがとございます、と言って頭を上げた男の顔は、ぱっと明るくなっていた。

「君はいくつ？僕より若いみたいやけど、大学生？」

「十九のフリーターです。こっちにはちょっとした用事があって、愛知から来てるんです。俺、東京来るの初めてなんでちょっと心細くて。ホテルにいても何だか寝付けなくてフラフラしてたら、あなたの歌が聴こえてきて、思わず立ち止まっちゃいました」

「ありがとう、そら嬉しいわ。また、聴きに来てな」

と言いながら、流原は手を差し出した。男は一瞬きょとんとしたが、すぐにその手を握り返した。男の手は流原よりも細く、ひんやりとした感触を彼に与えた。

久保、と名乗ったその男は、翌週も流原の演奏を聴きに来た。この前と同じ、くたびれたTシャツとジーンズ。足元はスニーカーからサンダルに変わっていた。

「おお、また来てくれたんや」

「覚えていてくれたんですね。この前のCD、最高でした。これ、良かったら」

そう言って、彼はよく冷えた缶コーヒーを流原に差し出した。

二人は歩道橋の端に寄りかかって、しばらく話し込んだ。ギターを抱え、ひとしきり歌い終わった流原の身体には、夏の生暖かい夜風でさえ、心地よく感じた。眼下にはロータリーが広がり、列を成した車のライトやハザードランプが、河のように流れている。視界の真ん中でちらちらとひかるそれを眺めていると、久保はぼつりと呟いた。

「あなたの歌詞に共感するんです。権力と、その下で見過ごされる、犠牲を描いた歌詞に。昔から自分が感じてることにもつながって、心に響きました」

「ありがとう。そうやって誰かの心に届いてくれたんやったら、僕は嬉しいで」

流原は優しく微笑んだ。

「そういう君、確か愛知から来とるんやろ？前会った時から一週間ぐらい経ってるけど、東京にはあれからずっと泊まってるん？」

「いや、帰ってますよ。今日も用事です」

「は一んエンレンか、遠距離恋愛でもしとるんか」

茶化して言ったつもりだったが、久保は少し驚いたように目を見開いた後、一息ついてからこう言った。

「幼なじみの女の子が、東京にいます。七年も会ってないんですけどね。今度、地元で会う約束はしてるんです。今日東京に来たのは別の理由があるんですけど…もしかしたら、何千万かに一の確率で会えたりするんじゃないかな、とは思っています。無理なのは到底分かってるんですけどね」

そう言う、と久保は小さなメモを流原に見せた。ところどころ汚れてよれた紙には、手書きで日時と場所が書いてある。聞けば、七年前、あらかじめその子と集合場所と日時を決めて、地元の愛知で会うことにしたという。しかし七年も会っていないとなると、顔もおぼろげにしか思い出せないのではなからうか、と流原は思った。

「その子の名前は？何て言うん？」

「ミヤタクウコ、っていいです」

ミヤタクウコ。少し引っかかったが、すぐにピンときた。

「おもしろいなあ、それ。『潮騒』みたいやで」

「しおさい？」

伊勢湾に浮かぶ架空の島を舞台にした、三島由紀夫の小説だ。権力者、成功者といった人物の葛藤を描くのではなく、漁夫と海女という、一般生活者に焦点を当てている。観念的で筆致が難解な作風だといわれる三島の小説の中でも、親しみやすさをもった、ある種異質な作品といわれている。

「三島由紀夫の『潮騒』って小説があつてな。島で暮らしてる若い男と女の純愛小説で、そこに出てくる主人公とヒロインの名前が、久保と宮田っていうねん」

へえ、と久保は生返事をしたものの、後から恥ずかしさがこみ上げてきたのか、照れくさそうな表情を見せた。

「君は何か好きな小説とかあるん？あんまり活字好きそうな感じにも見えへんけど」

「凶星ですよ。そうだなあ…」

もさもさとした彼の髪が揺れて目にかかる。まとまった髪が木の茂みのようにも見えた。彼は流原の横で少し考えた後、前を向いたまま答えた。

「一闇に葬られた犯罪を告発するために奮闘し、最後には自らも下手人へと成り下がった男の話です。昔、男にとって家族同然だった人々が、放火による火事で命を落としたんです。唯一生き残った少女も、心に大きな傷を負ってしまいました。怒りに堪えかねた男は、遂に仇敵を車で撥ねて殺してしまった、という話です。もう随分前に読んだので、作者

も題名も、忘れてしまいましたけどね」

終電が近づくにつれ、歩道橋を渡る人の姿もまばらになってきた。夕方まで絶えず鳴いていたはずの蝉の声も、まるで夏の夜に溶けたかのように、消えてしまっていた。流原は別れ際、目の前の男の肩に手をかけ、言った。「二人にはいろいろ困難が降りかかぬんけど、最終的には結ばれる話や。今会えるかは分からんけど、上手く行くと思うで、きっと」
一瞬、久保の目から光が消えた、ように見えた。気のせいだろうか。流原がもう一度視線を合わせた時には、さっきと変わらない笑顔を見せた。
「そうですね。そう思うようにします」

それから一週間が経った。駅前の方だろうか、拡声器から威勢のいい選挙演説が聞こえてくる。三曲ほど演奏したところで、流原は空を見上げた。駅ビルの向こうに、黒々とした雲が覗いていた。ひと雨きそうだ。
「ちょっと天候が怪しいので、今日はこの辺にします」
そう言ってマイクの向こうに視線を戻すと、見覚えのある顔が目に入った。久保だ。そういえば、彼はあれから姿を見せていなかった。

「久しぶりやね。CD新しいのできたんやけど、いる？」
流原はCDを片手に声をかけたが、久保はすみません、と言って断った。軽く唇を噛みしめてから、申し訳なさそうな声で言った。
「実は、地元で両親の面倒を見なくてはいけなくなってしまって、これからちょっと忙しくなりそうなんです。あなたの歌、しばらく聴けなくなってしまうと思って…これを」
久保は肩に下げていたバッグから封筒を取り出し、流原に差し出した。一見すると事務用品にしか思えない、縦長の茶封筒だ。

「…えーと、これはなんなん？」
「いや、個人的に伝えたいことを紙にまとめたんです。お金とか、怪しい書類じゃないですよ。大丈夫です」
封筒に注がれる、流原の訝しげな視線に気づいたのか、久保は慌てて説明を付け加えた。そのまま左腕の時計に視線を移し、流原の方を向いて言った。
「じゃあ、そろそろ行きます。素敵な歌をありがとうございました」
「おう、また時間空いたらおいでな」

思えば、この歩道橋の上で、観客の方から別れを告げられたのは初めてだったかもしれないな、と流原は気が付いた。今まで、数えきれないほど多く人間がマイクを携えた自分の前に黙って立っては、そのまま無言で離れていったし、視線すら合わせず通り過ぎて行った人は、もっと多いだろう。だからこそ余計に寂しく思えた。しばらく橋の上でほんやりと時間を潰し、右手に残った封筒を物憂げに眺め、ぴりぴりと封筒の口を切り始めた、その時だった。

ギキキキキッ。甲高いブレーキ音が耳に飛び込んできた。一瞬遅れて、悲鳴が聞こえる。見ると、一台の軽トラックが見たこともないスピードでこちらへ向かってくる。思わず運転席を凝視する。フロントガラスの向こうにいたのは、先ほど別れの挨拶を交わした、あの男だった。
トラックはスピードを保ったまま自分の下を通過した。キュルキュルとタイヤが空転する音。トラックに引き寄せられるようにして、流原は歩道橋の反対側へと走る。身を乗り出すようにしてその鉄塊を目で必死に追う。ぐんぐんと駅へ進むトラック。その先には選挙カーが見える。悲鳴。散り散りに走り出す人々。ブレーキを強く踏みしめる音がした。街路樹がトラックの目の前に顔を出す。危ない！トラックの右側が宙に浮き、車体が傾いたのが見えた、次の瞬間だった。ドーン、という地鳴りのような大きな音が、ロータリーに鈍く響き渡った。

大粒の雨が肌を打つ感覚で、我に返った。先ほどまであった街の喧騒は嘘のように消え去っている。そこに静寂を埋めるかのような激しい雨音だけが、辺りを包んでいた。恐る恐るロータリーを見降ろすと、前方部分がひしゃげたトラックが、事切れたように横たわっていた。

まさか。

次の瞬間、流原は歩道橋の階段めがけて駆け出していた。あかん、分からん。それしか浮かんでこない。転げ落ちそうになりながらもロータリーに降りたつ。目の前には大小の鉄片が至る所に散乱していた。すうっ、と血の気が引いていく。何が起こったんだ。急ぎ立てられるようにトラックの元へ走り寄る。異常事態だ、と五官が騒いでいたが、頭で理解するまでにはいかない。焦りと不安で脈打つ自分の鼓動は、信じられないほどの速さで響いていた。
ガソリンの臭いと、タイヤが焦げた臭いが鼻をつく。全身を雨で濡らしながら、おぼつかない足取りで車体前方へと近づく。ほんの数分前、猛烈な速度で自分の眼下を通り過ぎて行ったはずのトラックは、押し黙るようになって目の前に横たわっている。前輪の周りには無数のガラス片。思わずその中の一つを手取る。粉々に砕けてはいたが、それは紛れもなく、久保と初めて会った日に売った、自分のCDだった。

そこからどうやって帰ったのかは覚えていない。テレビも携帯も、怖くて見られなかった。ぐらぐらと揺れる思考を抱え込むようにして眠りに就くほかなかった。

窓から差し込む朝日で目を醒ましても、気分は晴れなかった。

ふと、あの直前まで手にしていた封筒の存在を流原は思い出した。上体を起こして慌ててバッグを持ち出し、中をあちこち引っ掻き回す。紙の柔らかな感触が彼の皮膚を伝った。勢いよく封筒を挿んだはずの手は、小刻みに震えていた。その口を広げ、指を入れると、。白い便箋が数枚、入っていた。ゆっくりと深呼吸をし、意を決して文字に目を通す。

そこには、以前彼が語っていた小説、つまり久保自身が企てたすべてが書かれていた。T 駅前の選挙カーに車ごと突っ込み、そこにある政治家を、殺す。それが久保の目的だったという。自分を家族同然に育ててくれた人々を奪った男への復讐なのだ。

封筒からは、小さな新聞記事の切り抜きも出てきた。日付は十年前、ある一家が、放火とみられる火災で、娘以外の全員が亡くなったことを伝えるものだった。その娘こそが、宮田優子だったのだ。

久保の手紙によれば、放火犯は地元の有力者の息子だったが、当時まだ若かったために罪に問われることはなく、また政治的な圧力によって、事件そのものが揉み消されていったという。

その息子が政治家となり、今度は国政に参加すると知った。やるなら今しかないと思った。万が一捕まったとしても、十代の自分なら少年法に守られるから、すぐに名前が出ることはない。だから彼女を悲しませることもないだろう、と

。しかし、久保は失敗してしまったのだ。

あの歩道橋には、現場の下見にでも来ていたのだろう。しかし、彼はわざわざ僕に身の上を話すようなことをして、CDまで買っている。真意は分からない。が、彼は止めてほしかったのかもしれない、今まさに墮ちて行こうとする自分を。孤独だった彼が、僕の歌に抛り所を求めたのかもしれない、と流原は思った。そして彼の言っていた、約束の日は、確か今日だったかもしれない。

時計を眺めながらしばらく考え込んでいた流原は、長いこと穿いていなかったジーンズを引っ張り出し、おもむろに着替え始めた。髪もどことなく野暮ったく見えるよう、指で梳いて乱す。念のため、マスクも用意した。財布を開く。愛知までの往復分は、有り金で確保できそうだ。

彼は以前久保から見せてもらったメモの存在を思い出していた。今やろうとしていることが正しいのかは、分からない。しかしこれしか考え付かなかった。いつかは醒める夢をわざわざ見させるようなことは残酷なことかもしれない。だが、彼が死んだと、犬死にだったと伝えることもしたくないし、思いたくもない。何より、自分の歌を愛してくれた、若い男に報いたいと思った。

流原は身支度を済ませると、足早に外へと出て行った。